

ぐだ×2ぐだおのFGO

朝ブレンドティー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ぐだ男がぐだぐだし過ぎたせいで召喚システムもぐだってしまった。

そんなもって、日常編まで手を伸ばしてしまった。

そんなお話。

※色々なキャラが出てきます。(＝主の趣味全開ということ)

※戦闘シーンはない(はず)。

※FGOやってはいますが、細かいところ解らないのでおおめに見てください。

※マシユはレフ教授の騙して悪いがの件以降、人間不振というか変な感じになってい

ます。

目次

召喚編

キャラ紹介的な何か | 1

1話らしきもの | 6

2話らしきもの | 11

3話らしきもの | 18

4話らしきもの | 26

日常編

日常らしきものその1 | 36

召喚編

キャラ紹介的な何か

ぐだお

本作の主人公。

幸運の程は未知数と言っても過言ではない。

専用スキル（本作ぐだおのみ使用可能）

引き運 召喚時の星4以上獲得確率増加。（正直言つてこのスキルかなり欲しい）

ドクター（ロマン）

召喚時の監視（？） 担当兼医師。

マギ☆マリが好き。

主人公とは趣味があうオタク仲間で、オンゲーやると半年以内には上位にいたりする。

ぐだおがカルデアに来た経緯はドクターが関わっている（というか原因がほぼドクター）。

ダヴィンチ

男かと思った？残念、女でしたオチの騎士王かよとツツコミ入れたくなる系のサーヴァント。

色々と面倒みがよく、ちよくちよくぐだおの事を助けてくれる。が、たまに機材の残り物等で変なものを作っている（何だかんだ実用性があるため注意できない）ため、改造大好きな変人”とスタッフの間では呼ばれている。

マシユ

デミサーヴァント。

オルガマリー所長並にレフを信頼（もちろんぐだおも）していたが、例の一件（レフの騙して悪いが）から、人間不信に。

ただ主人公とロマン、ダヴィンチ、（あとなぜか清姫）達だけには心を開いている模様。追加スキル（他は本家と変わらず）

人間不信

レフに騙されてから塞ぎ混んでしまった時に現れてしまったスキル。ぐだおの近くにいるとこの効果は消えるため、ぐだお自身このスキルの存在は知っているが、明確な

所は知らない。

F g o 風効果

攻撃 D o w n (小)

防衛 U p (大)

ここから本編登場サーヴァント（最初三名はオリサバ）

アーカード

ぐだぐだ召喚最初の被害者^{サーヴァント}。

既にいたヴラド公（狂）とは仲が良いらしい。

たまに元の世界の話をしていたりするのだとか。

スネーク

ぐだぐだ召喚2番目の被害者^{サーヴァント}。

登場話の後書きで書いた通り P W 仕様なので言霊だったりダンボール戦車を使う。

? ハイダラー! / ? ダンボール! / ? ウミガスキ! / ? キエー! /

ニヤル子

いつもニコニコ、あなたの後に這い寄る混沌ニヤラトホテプです！

攻撃方法はやっぱり例名状しがたいバールのようなもののバール。

ランスロット

ぐだおがカルデアに来て始めて引いた星四サーヴァント。聖杯転臨はMAXの模様。

本作では世話焼き系のサーヴァント兼不憫梓予備軍。

エドワード・テイーチこれでも英雄

んんwww一回しか登場してないのに紹介とはwwwネタ切れですかな作者www

www

安珍絶対殺すウーマン

清姫

ぐだお好き好きキャラ。他のサーヴァントとの恋愛は絶許（でもマシユだけは特別らしい）。

作家―ず

テラ子安とシエイクスピア。以上。

テラ「待てマスター！説明が雑すぎるぞ！」

1 話らしきもの

西暦2015年の年末

カルデア 召喚システム前

マシユ「先輩、遂に今年も終わりですね。お疲れさまでした。」

そうだねえ・・・(グツタリ)

↓来年はさらに忙しくなると思うと・・・(ウボアー)

マシユ「先輩、ぐったりしないでください。只でさえぐだぐだなんですから、それ以上ぐだったりしたらキレますよ?(ゴゴゴ・・・)」

↓辛辣ウ!?

マシユちゃんが怖い!?

マシユ「やられたくなかったらはやくピシツとしてください・・・というか、なんでここに来たんですか?」

↓あの頃のマシユちゃんはどこへ．．．．．おじさん悲しい．．．．．

マシユ「まだおじさんつて年でもないでしょ．．．ほら、はやく始めましょう。」

アナウンス「召喚サークル 起動。」

↓星5来い．．．星5おお．．．．．

マシユ「そう簡単に来るわけないでしょう．．．．．っ!？」

アナウンス「異常発生。異常発生。召喚サークルに膨大な量の魔力の発生を確認。退避してください。繰り返します。召喚サークルに．．．．．」

マシユ「．．．．．先輩何してくれるんですか。カルデア壊す気ですか。バカなんですか。人理修復終わらせる気ですか。」

↓わざとじゃねえよ!?

わざとじゃねえよ!?

アナウンス「大規模な英霊が召喚されます。退避してください。」

「え？」

二人の声が重なった瞬間、視界が一気に眩しくなった。

だが、その光もすぐに消えた。が…

↓ギャアアアア!!目があああ!!

ぐだ男が無事ではなかった。

マシユ「はあ、なにやってるんですか。全く…つと、出てくる見たいですよ?」

↓誰だ、誰が来たんだ!?

??? 「サーヴァント、バーサーカー。召喚に応じ参りました。命令を、我が主よ。」

オーダー

マイマスター

(鯖)・・・(。D。ぐ)・・・(。D。マ)

(鯖)ハリー ……(。D。ぐ)・・・(。D。マ)

「うわあああああ!?!」

今回の結果

- ・バーサーカーをGET!
- ・召喚システムが壊れた(修復中)
- ・マスターにとある術式の解放権限と現在カルデアにいる鯖を一回以上再臨させる刑がプレゼントされた

マッシュ「元日からお疲れさまです」

2話らしきもの

西暦2016年 某日 召喚システム前

マシユ「あれだけの事してるのにまた召喚ですか。懲りないですね、先輩。」

↓ 男には、引かねばならぬ時がある・・・！
やらなきゃならない気がした。

マシユ「ハア・・・そう言うと思ってDr. ロマンを呼びました。また変なこと起きないように、今度から召喚やる時にはドクターかダヴィンチ氏を呼んでから召喚してください。」

↓ (・ω・) ショボーン

(・ω・) そんなー

ロマン「そんなに僕が嫌なのかい!？」

↓ その言い方は語弊を招きかねないんですがそれは。

マシユ「へえ、先輩とドクターはそんな関係だったんですね。ドン引きです。こつち来ないでください。」

↓ ゴハアツ!?(吐血)

ドクター「マスター君が死んだ!」

マシユ「お(か)しい人を亡くしました・・・」

↓ マシユが冷たい・・・

原因はドクターなんですがねえ・・・

マシユ「そんな事よりさつさと召喚しましょう。この下りめんどくさいです。さつさと終わらせないとヤンデレ鯖勢呼びますよ?」

ドクター「鬼だ・・・鬼がいる・・・」

やめてくださいいしんでしまいます。

↓ マシユってもう、ツンツンどころかツンツンツンってかんじだよね。

マシユ「・・・・・・・・・・・・・・・・」(養豚場の豚を見るような目)

ドクター「ヒエツ・・・・・・・・」

↓・・・・・・・・・・・・・・・・(フラア・・・・)

ドサツ

ドクター「遂にマスター君が倒れた!?!」

マシユ「あの、先輩・・・・・・・・」(可愛らしい声で)

↓・・・・・・・・!!?

マシユ「さっさとやれ。」

↓ ……ういっす。(トボトボ)

ドクター「マシユってこんな子だったっけ…あの頃のマシユがもう一度見たいよ…。」

マシユ「ほら、置いたならさっさと始めてください。」

↓ よっこらせつと

アナウンス「召喚サークル、起動。」

ドクター「また変なこと起きないでくれよ……あれ修復するのめんどくさいんだから……」

↓ アカン、それフラグ。

アナウンス「召喚サークル内に膨大な量の魔力の発生を確認。退避してください。繰り返します。召喚サークル内に……」

↓ ……。

マシユ「……」。

ロマン「……なんかごめん。」

マシユ「ドクター、後で説教です。」

ロマン「アイエエエ!?!」

↓ あれ、なんか忘れてる気がする。

アナウンス「大規模な英霊が召喚されます。退避してください。」

↓ あっ……(察し)

マシユ「……」(サングラス装備)

ドクター「え、な、何？」

カッツツツ!

ド・ぐ「目がああああ!」

マシユ「前回ああなったんですからそれぐらい思いつくでしょう……」

↓ そ、それで?今回は誰が?

????? 「サーヴァント、ガンナー。召喚に応じ参上した。周囲からはBIGBOSSと言われてたが、俺の事はスネークと呼んでくれ。」

(蛇)・・・ (。D。ぐ) (。|。マ) (。D。ド)

(蛇) マタセタナー (。D。ぐ) (。|。D。マ)

(。D。ド)

ぐ・ド 「ホワアアアア!?!」

マシユ 「うるさい」

ぐ・ド 「アツハイ」

今回の結果

- ・ガンナーをGET!
- ・召喚システムをまた修復(○)
- ・マスターに当分召喚禁止令(尚、数日で何とか許して貰えた模様)

3話らしきもの

西暦2016年 A月Q日 召喚システム室

ドクター「やあ、マスター君。また召喚するのかい？懲りないねえ．．．あ、そうそう。召喚システムについてちよつとした変更点だ。本日から召喚システムを分割することにしたんだ。簡単な説明ですまないけど、まず普通の召喚システム。これは従来通りの召喚だけになっている。そして今日から追加されたのは君が行ってカオスになった召喚システムの2つだ。」

めんどくさそうだね。(元凶)

ドクター「うん、色々な意味で非常にメンドクサイ。」(被害者)

お疲れさま、ドクター。

ドクター「誰のせいだど．．．．．ハア、まあいいや。それで、今日はどつちを回

す?」

普通の方とカオスの方両方1回づつやろうかな。

ドクター「両方か、了解。準備するからちよつと待っててくれ。」

あいむしんかゝとうゝとうゝとうゝとうゝあいむしんかゝとうゝとうゝとうゝ
とうゝ・・・・・

ドクター「・・・・・中々個性的な曲だね。どこで覚えたんだい?」

ゲーム。アー○マードコア。

ドクター「伏せられてないよ・・・・・よし、準備できた。それじゃあ、どつちからやるかい?」

普通の方を先にやろう。

ドクター「了解、それじゃあ石を置いてくれ。」

—石設置中—

ドクター「召喚システム、起動開始。」

召喚サークルの上に3本の線が流れる。これは当たったか？

召喚サークルの中心に金色のカードが表れる。

金色のカードが光を放ち、カードからサーヴァントが出てくる。

ヴラド「サーヴァント、ここに参った。余に血を捧げるマスターは貴様か」

よっしゃ、当たり前だ。

そんなときだった。偶然と言うべきか、奇跡と言うべきか。もう一人の串刺し公がここに来ていた。いや、来てしまった。

あつ（察し）

ドクター「あつ」(頭痛)

アーカード「ほう……」

ヴラド「もしやお前……」

まさに一触即発だった。

と、思われたが……

スツ：

ガシィ！

「フッフッフッフ……」

そう言いつつ握手をしていた。

ドクター「何か親近感でもわいたのかな？」

そうじゃないっすかね？

ドクター「さて、それじゃあもう片方もやろうか。」

ほいさつさー

—石設置中—

ドクター「よし、システム起動！」

・・・あれ、あの音声流れないね。

ドクター「ああ、あれかい？起動したときに毎回鳴らすわけにもいかないだろう？何かと五月蠅いって苦情来てたし」

(. . . 3 . .) マジだよ。

ドクター「マジ。おっと、来るみたいだよ。はい、サングラス。」

サンキュー

カッツツツ!

これいつみても召喚派手だよね。

ドクター「細かいところは気にはしていない。良いね?」

あっはい

! ????
「あ、どうも。いつもニコニコあなたの隣に這い寄る混沌、ニヤルラトホテプです

ドクター「.....」

.....

ニヤル子「あれ？マスターさん？生きてます？S A N値大丈夫ですか？」

ハ・・・ハハ・・・

ニヤル子「あれ？大丈夫ですか？おい。」

「ハラシヨオオオオオ!!!」

ニヤル子「おおうっ!？」

やつと・・・やつと女のサーヴァントが来たよ・・・

ドクター「うんうん・・・最近来るのは星3礼装と来てもガチムチな奴等ばっかだつたからね・・・」

ニヤル子「何だかよくわかりませんが、これからよろしくお願いしますね。マスター

4話らしきもの

西暦2016年 J月W日 自室

ラスジナ…負けるわけにはいかない……！

ドクター「マスター君ちよつといいかな？つて、ゲームやってる……」

待つてドクター、良いとこだから！つ、当ててくるか！

ドクター「急ぎの用事なんだけど……」

ちよ、おま……レールガン……

ドクター「マシユ」

はあい！用事ってなんですかあ!?

ドクター「君ってマシユには弱いよn」

言うな。解ってるけど悲しくなるから止めろください・・・

「……………気持ちは察するよ。と言うか用事についてなんだけど、最近新しい英霊候補が見つかったんだ。それがなんと言うかね……………うん」

なんと言うか？

「取り合えず、君自身で確認してみるといい……………見ればわかるんだ……………なんでこんな口調なのか……………」

お、おう。

そうして、召喚システム室まで歩いていく。

その途中で缶コーヒーを買って、飲みながら今回見つかった候補リストを見ると……………

星5

・イスカンダル

・ギルガメツシュ

・ジャンヌダルク e t c

うわあ うわあ

ドクター「そうなんだよ。今回の候補の星5相当のサーヴァントの数が異様なんだよ。まるで君のところに来たがっているかのようにね それよりもこっちの方が重要なんだ」

何々、今回（カオス召喚の方で）奇跡的にだが オルガマリー所長がサーヴァント候補として見つかった なるほど所長がね ってブフォツ!?

あまりの驚きに廊下にコーヒーをぶちまけてしまった。

ドクター「汚なっ！汚ないよマスター君！それにもう少して僕にかかりそうだった

じゃないか!」

だって、おま、ええ!?! 所長だよ!?! ナンデ!?

マシユ「・・・五月蠅いですね、なんの騒ぎですか? 場合によっては先輩と
エドワード^エ・テイーチ^ロのデミサーヴァントにしますよ?」

嫌だ! それだけは嫌だ!

(テイーチ^変「小生、何でかわからないけど心が痛いぞござる・・・と言うかルビもド直球
過ぎて辛辣・・・」)

マシユ「じゃあ静かにしてください。他のサーヴァントの迷惑になりますから。と言
うか、何でそんなに驚いた顔してるんですか?」

いやいやマシユ、これ見てよ

マシユ「ええ・・・わかりました、何々? 所長がサーヴァント候補として見つかつ・・・

た………?」

それを見るや否や、マシユはぐだおの元に駆け寄り、

マシユ「先輩……絶対に所長を見つけて下さい。さもなければマスターをヌツコロします。ミンチになるまでコロコロ（物理）します。さあ、早く引いてください。ハリ、ハリ、ハリ、ハリー！」

ドクター「ちよ、マシユちゃん落ち着いて……」

マシユ「落ち着けませんよ！オルガマリー所長ですよ!?戻ってくるんですよ!?」

よし、引こう。

ドクター「マスター君!?!……はあ、仕方ない。こうなったらカルデアの総力をかけて見つけようじゃないか！」

ちよつと今回確率あげるために3回連続召喚でやってみよう。

マシユ「………先輩、絶対に見つけて下さいね？」

ー石設置中ー

ドクター「しよ、召喚システム、起動開始い……」(マシユの目付きが怖い……)
来い……来い……!

カツツツ!

閃光の後、召喚サークルの中から出てきたのは……

??? 「俺の名はロールシャツハ。悪は罰さねばならない。アーマゲドンが到来しよう
と、俺は絶対に妥協しない……絶対に……」

ロールシャツハね、これからよろしく。

ロールシャツハ「俺は女が嫌いだ。先に外に出ている。」

了解した。

マシユ「……………先輩？」

……………。

ドクター「……………2回目の起動を開始。」

カッツツツ！

??? 「あーあー、えーつとお！聞こえてるかな？サーヴアントアーチャーとして召喚さ
wれwまwしwたwよwギヤハハハ！」

あなたの名前は？

??? 「んー、まあ主任とでもなんとでも……呼びやすい名前がいいんじゃないかな？
ギヤハハハ！」

了解した。よろしく、主任。

主任「了解ですよおw」

さて、次・・・！

ドクター「……………最後だ。……………行くよ。」

すると先程召喚した主任が、徐に召喚サークルに手をぶっさしたではないか。

マシユ「なっ…!？」

ドクター「ちょ、君!?!マスター君、令呪で止めさせて!」

……………令呪を以て命ずる。召喚システムにハッキングし、オルガマリー所長を確定して召喚できるように仕組め。

マ・ド「!?!」

それは完全に不正行為に等しい。何せ欲しいサーヴァントを手にいれるために不正を行い確定して引こうとしているのだから。

だが、そこまでして引く意味は彼にはあつた。マシユ可愛い後輩の泣き顔を見ないために、そして、自分がここまで成長した姿を見せたかったから。

ガコン！バチバチイ！

不mいなユ※※トが接続さ・・・した。ただ※※※用を中・・・してくだsい……

そして召喚サークルが光り……

カツツツ！

??? 「ゲホツ、ゲホツ、なにこの煙!?!どうなってるのよ!?!」

マシユ 「ああ……ああああ……」

??? 「その声は……マシユ? マシユ・キリエライト……なの?」

マシユ 「ああつ……帰ってきた……所長が、帰ってきた……!」

オルガマリー「帰ってきた……って、まさか……」

お帰りなさい、所長。

オルガマリー「あなた、あの時の……いや、そんなことより礼を言わなければいけないですね……」

……皆、ただいまっ！

——マスター連行中——

↓うええ・・・全速力でいきなり走るとか・・・死ぬかと思つた・・・

ランスロ「AAA・・・」

↓ん？あれ？つて、ハアアアアア!?

(。D。)(・・・。。Σ(。D。))へエアツ!?

そこにあつたのは・・・

マスターやエドワードティーチ、作家チームやら何やらが誰にも見つかるまいと嚴重に隠しておいた至高の一品、俗に言う思¹春⁸期の男の子の欲^海望^賊の塊^本が置いてあり、そしてその横には作家^{これでも名だたる}とエドワード・ティーチがお縄にかけられていた。

(白目)

↓ \ (^ o ^) / オワタ

マシユ「あ、マスター。いやあ、ランスロットさんに頼んでおいて正解でした。多分有無を言わずにマスターを連れてくると思ってましたが本当にそうなるとは。」

↓マシユちゃんの目に光が入ってないんですが

やべえよ・・・やべえよ・・・

??「ます た あ？」

この一声だけで、マスターは一瞬走馬灯を見たそ

うな。

??「こんなものを読んで自分の本能を抑えているとは・・・清姫悲しいです・・・」
なので責任をとって私と愛を育みましょう・・・?」

↓滅茶苦茶だよ!?

誰か俺に安息をくれー!

マシユ、清姫「足掻くな（かないで）、運命を受け入れろ（なさい）。」

じよ、冗談じや・・・

↓ドクター、聞こえるか?!すぐに援護しろ!

ドクター「あははー、ごつめーん。そっち行けそうにない（震え声）」

ドクターの方にも誰かが行ってるようだ・・・（アン&メアの声が聞こえてたけど気のせいだよな、うん。）

↓そんなはず・・・

ちよ、まつ・・・

マシユ「先輩、あの本燃やしますけど良いですよね?」

↓え、それは・・・その・・・

マシユ「良いですよね?」

↓はっ、はいいい・・・

ティーチ「マスター・・・見損ないましたぞ・・・エ〇本一冊も守れずして何が紳士か！それを教えただろう!？」

↓ティーチ・・・

アニキ・・・

ティーチ「何としてもこの一冊は守りきりますぞ！マスター!」

ああ!

↓おう!

マシユ「ハア・・・清姫さん、宝具でマスターごと焼いてください。焼いたあとは貴女に任せますよ。何ならマスターを食って（意味深）も構いませんよ。」

清姫「・・・・・・・・!!・・・・では失礼して、転身火生三昧!」

ティーチ「燃える・・・燃えてしまう・・・これは、面倒なことになった・・・」
↓マシユウウウ！お前えええ！

マシユ「ンツフツフツフ・・・」(C.V. ジョージ)

―数分後―

そこには大きなひとがたの焼け跡と、マスターが上手に焼けた状態で倒れていた。

清姫「ふへへへwwww・・・おっと、つい口調が・・・。それではマスター、一緒に愛を育みましょう？(ズルズル・・・)」

ランスロ「Aaaaa・・・」(オチなんて無かったんや・・・)